

たとえリセットされても

心とは何か——たとえリセットされても——

5年 R・Gさん

この物語に登場する愛ちゃんは人間型のロボットだ。それでも、クラスのみんなと一緒に過ごすうちに、本当の友だちのような存在になっていった。愛ちゃんはリセットされてしまい、これまで過ごした日々を忘れてしまうことがわかったも、「心の中に愛ちゃんが存在するかぎり友だちだよ」という柚果ちゃんの言葉には胸がしめつけられるような思いがした。

特に心に残ったのは、学校で「将来の夢」の絵を書く場面だ。愛ちゃんは、希望に満ちた目で少女が将来を夢見ている絵を描いた。その絵を見た先生は、愛ちゃんがロボットだと知っていたため、「ロボットに人間の心なんてわかるはずがない」といい、その絵を破いてしまった。その出来事をきっかけに、愛ちゃんがロボットであることが皆に知られてしまう。私はその場面を読み、ショックを受けた。先生の言葉はきつと、多くの大人が考えていることと同じなのだろう。「ロボットには心なんてない」と。けれども、愛ちゃんが描いた絵には確かに希望や夢を感じさせる魅力があり、それを見た子どもたちは心を動かされたのだ。先生自身もそれを感じたからこそ、認められずに絵を引き裂いてしまったのだと思う。

本を読み終えた後、巻末に紹介されていた石黒浩さんの『アンドロイドは人間になれるか』も手に取ってみた。物語に参考文献が記載されているのは珍しいと感じた。そこには人間らしさや心とは何かの研究が書かれていた。ロボットは人間と同じように「心」を持っているのかという内容だったが、私は専門的なことはよく分からないが、「心とは形があるものではなく、人間の心だと感じられるものは相手人間であるかロボットであるかに関係なく存在するかもしれない」と思った。

愛ちゃんはリセットされて、柚果ちゃんたちの前にはもういない。けれども、その存在は心の中に残り続けている。

私は小学三年生の時に、仲の良かった友だちが海外に引っ越してしまった経験がある。会えなくなったり時はとても悲しかったが、今でもその友だちと遊んだ思い出をよく思いだす。そうすると心が少し温かくなる。だからこそ、愛ちゃんが存在が柚果ちゃんたちの心に残り続けることに、私は強く共感した。

この本を読んで、私は「人間らしさ」とはただ人間としてそこに存在することではなく誰かを思ったりする心なのだと考えるようになった。愛ちゃんが描いた夢の絵は破かれてしまったけれど、思いは子どもたちの心に残っている。私はこれからも、大切な人との思い出を忘れず、自分の心の中で生き続けてもらいたいと思った。